

あとがき

第5回オマージュ瀧口修造展は瀧口先生自身の絵画作品——ドローイング、水彩、バーントドローイング(焼き焦しのドローイング)、デカルコマニー、ロト・デッサン(モーター利用による円のデッサン)等160点余を展示する賑やかな展覧会となった。当画廊のスペースでは一挙に全作品を展示することは不可能であり、止むなく期間中に一部作品の入替えを行わざるを得なくなった。この点予めご了承をお願い申し上げます。

瀧口先生のデカルコマニーの連作「私の心臓は時を刻む」100点は富山県立近代美術館の所蔵で、この作品は関係者の間ではつとに有名であるが、この連作と「詩人の肖像」(デカルコマニー)1点計101点がすでに4月20日から同美術館で展示されている。8月31日まで展示されているので、当画廊のこの展覧会ともども機会があればぜひご覧いただければと思う。この両展覧会をみることにより、瀧口先生の絵画作品のほぼ全貌が明らかになると思われる。一言ご案内申し上げますのであります。

瀧口先生は昭和54年7月1日に亡くなられたが、その命日月の7月に当画廊では毎年、瀧口先生と関係の深い作家の展覧会を開催し、先生を讃え、偲んでいる。すでに過去4回、展覧会を催しているが、その内容は別記1のとおりである。

今回は瀧口先生自身の作品を展示することとしたが、その理由は第一に瀧口先生の絵画作品をみたいという人が多

いことである。私もそのうちの一人であるが、先生を直接知ることもなかった若い人に熱烈なファンが多いのである。第二に今年は瀧口先生の七回忌という節目に当るからである。

当初の予想では作品は50点も集まればいいな、と思って出発したのであるが、結果としてはその3倍を超える作品が集り、嬉しい悲鳴を挙げる事態となった。貴重な作品を快くお貸しいただいた皆様に厚く御礼申し上げます。ご協力いただいた方のご芳名は前出のとおりであります。

展示作品はすべてカタログに収録したが、これら作品の手法別、年代別のリストを別記2のとおり作成したのでご覧いただきたい。このリストから色んなことが読みとれるが、瀧口先生の自筆年譜と読み合わせるとさらに興味深いものとなる。

例えば、1960年になって急に制作が始まったのは、1959年の年譜で、ジャーナリスティックな評論を書くのに障害を憶えるようになった、と記されているのと符号するようだ。また1963年から68年にかけて作品が少ないのは、恐らく赤瀬川原平さんの千円札事件、さらにデュシャン語録の作成と無縁ではあるまい、と推測できるのであるが、どうであろうか？

次に、瀧口先生の展覧会の記録を別記3にとりまとめたのでご参考に供する。生前は、デュシャンやミロとの関連の展覧会を含め6回、没後は2回(この展覧会を入れると3回)を数える。

ところで、カタログの巻末に瀧口先生の戦前の作品の写真を2点収録したことについて若干触れておきたい。2点ともデカルコマニーの作品であるが、うち1点は「みずゑ」1937年5月号(P.498)に掲載されたもので、次頁には綾子夫人の

作品が並んでいる。今井滋氏の「デカルコマニーと其の方法——〈白の上の千一夜〉を中心として——」なる文章に関連し、その後この作品がみえる。もう一点は同じく同年同月発行の「みずゑ」の特集号“ALBUM SURREALISTE”(みずゑ臨時増刊、海外超現実主義作品集)の表紙の作品である。

先生の自筆年譜によると1962年(昭和37年)の冒頭に「元日から前年偶然貰ったグアッシュを使い、久しく忘れていた(傍点筆者)デカルコマニーに没頭する。……」とある。つまり上記の作品から先生は戦前—1937年—にすでにデカルコマニーを制作されていたことが分る。そしてこのことは、デカルコマニーの創始者オスカー・ドミンゲスが、1935年頃に初めてデカルコマニーを制作したとされることからすると、実にわずか2年後ということになる。

今回のこの展覧会のために、ポスター、ポストカード6点(1組)、そしてカタログを作成した。カタログについてであるが、序文は武満徹さんをお願いした。大変お忙しいところをご無理申し上げ、恐縮している。心のこもったすばらしい序文をいただき大変嬉しく思っている。

作品の解説であるが、これは瀧口先生が御自身で先生の作品を語っていただくかたちをとった。すなわち、「私も描く」(芸術新潮1961年5月号)および「口上」(新宿のバー・セバスタチャンにおける自作展の口上、1971年11月)を再録した。この文章は短文ながら先生の考えがコンパクトにまとめられており、貴重な資料である。またこの文章が活字となるのはこれが初めてである。所有者の加賀見政之さんのご好意に感謝いたします。

瀧口先生の詩集、評論集はすでに出版されているが、画集は一冊も出版されていない。私としてはこの展覧会を機

に出来得る限り先生の作品を収集し展示するとともに、作品を一冊のカタログ＝画集にとりまとめたという強い希望をもっていた。瀧口先生は多面的な仕事をされた方であるが、少くも先生の絵画の部分を明らかにしておくことは私の仕事である、と何時の間にか思い込んでしまうようになった。近い将来、瀧口修造の仕事の全貌がかたちとなって現われることを強く期待するが、このカタログが絵画の面でのワンステップとなれば嬉しい、というのが私の気持ちである。

さらに言うならば、真に純粋なシュルレアリストであった瀧口修造、戦後の日本の現代芸術全般、さらにはそれに係る人々それぞれに、大きな影響を与えた瀧口修造を讃え、先生のファンや現代美術の愛好家の皆様に、先生の作品をみていただく展覧会——勿論、完全とは言えないが、私としては精一杯のかたちで——を開催できたことに、いまひそかな満足感を覚えている。この展覧会は、カタログを含めて、私としては私流の瀧口修造七回忌法要の積もりなのである。

この展覧会の開催、カタログの作成については何人かの人々の温かいお力添えを得た。改めてお名前を記さないが、厚く御礼申し上げます。

最後に、瀧口綾子夫人にはこの展覧会の企画以来いろいろとご教示いただく等ご配慮にあずかり、感謝している。本当にありがとうございました。

1985年7月8日

佐谷画廊

佐谷和彦